

グラバー商会と薩英戦争

門 田 明

グラバー商会 (Glover & Co.) は、1859 年日本に渡来したスコットランド人、トマス・ブレイク・グラバー (Thomas Blake Glover) により設立された^①。1860 年頃すでにこの会社が存在したことを示す証拠があり^②、1870 年前半期には、長崎対外貿易総額の大半を独占するまでに成長している^③。しかし、この時期までに累積していた多額の負債が表面化し、同年後半に入って破産に至った^④。この会社は本拠を長崎に置き日英貿易を行ったが、幕末維新の激動期に長州・薩摩などいわゆる西南雄藩と深いかわりを持ち、陰に陽に日本の歴史に影響を与えたことは、人のよく知るところである。しかし、この間の経緯について、グラバー自身語ることが極めて少なかったために、末知のまゝに残された部分が多い。したがって、小さな事実を探りあて、それを繋ぎあわせて全体像に迫る努力が、今後もつづけられねばなるまい。小稿は、Rennie, D.F., *The British Arms, in North China and Japan: Peking 1860 : Kagoshima 1862*^⑤. London, 1864 によって、薩英戦争に際し、グラバーが薩摩藩開明派の人々と戦争阻止のため腐心した事実を、多少紹介したいと思う。

薩英戦争は、文久2年8月21日(1862年9月14日)に起った薩摩藩士による英人殺傷事件、世に言う「生麦事件」に端を発している。英国は薩摩藩に対して犯人の死刑と賠償金の支払を要求し、艦隊を派遣したが、攘夷運動極盛期の薩摩はこれに砲火で応じたため、砲撃戦に発展した。これは一般に良く知られていることである。

一方、当時長崎にあった五代才助など開明派の人々は、英国と戦争することの無謀であることを夙に承知していたから、密かに賠償金を支払うことによって英艦の鹿児島来寇を阻止しようとした。五代才助「伝記」^⑥によると、

此際君は長崎にありて、深く国家の後事を慮り、努めて両国の調停に奔走し、英人「ガラバー」^⑦と謀り画策將に成らんとす。然るに藩議紛々として、概ね防戦に決し頻りに戦備を講じ、英は又罪を鹿児島に問んとして軍艦を發せんとす。君慨然、堀孝之と共に馬に鞭して国に帰り…… 日々其動静を窺ふ。

とあり、五代がグラバーとこの件で相談したことが知られる。先に述べた *The British Arms in North China and Japan* の著者レニー (Rennie) は、丁度薩英戦の一週間前、8月7日、たまたま長崎に立寄り、グラバーの紹介で五代らと会い、この問題で意見を交している。この記述によって、五代伝記に述べられている「画策」の内容にやや光を当てることができる。

このレニーという人物は、イギリス駐支派遣軍の軍医で、エルギン卿 (The Earl of Elgin) の探險旅行などにも同行した人物であるが^⑧、それ以上のことはあまりわからない。当時、上海での勤務を解かれ、日本に休暇で来ていたが、8月1日、横浜を出航し上海にむかうフランスの

軍艦モンジュ号 (The Monge) に便乗し再び中国に帰る途中、長崎に上陸し2日間をここで過している。長崎には8月5日に到着し、翌日・翌々日市内を見物しているが、8月7日は蒸気動力の工場 (steam factory)^⑨ を見学し、ついでグラバー商会に出かけている。ここでグラバーから薩摩藩士に会うよう依頼されることになるが、レニーは次のように書いている。

グラバー商会は、薩摩に対するわれわれの要求を鹿児島でつきつける件に関して大変心配しており、私が横浜に滞在していた事情から、長崎でその時他の誰よりもその問題を熟知していることを知り、会社の誰かと日本人町へ行き、そこに住んでいる二人の薩摩の役人に現在の状況を説明するよう、私に求めた。^⑩

こういうわけで、レニーは薩摩藩士に会いに行くが、この記述から、薩英紛争の帰趨についてグラバー商会が深い関心を持っていたことをうかがうことができる。

グラバーは、すでにこれまでも薩摩藩士とこの件につき論議を重ねている。レニーの書物の378頁には、グラバー自身が彼に語ったこととして次のように書かれている。

われわれが帰る途中グラバー氏が私に知らせたところによると、彼は英国の軍艦が鹿児島へ向っていることを知らされていたために、賠償問題について彼らと数回話し合いをした。そしてグラバー商会に金を渡し、英国政府勘定の貸方に払込んでもらうことによって困難を乗り越えることができるかどうか、また艦船の来訪を避けることができるかどうか、の質問を受けていたということだった。勿論一私企業にそんなことをする能力がないことは彼らに説明したが、もしグラバー商会が金を受取ることと同意していたら支払われていただろうと、グラバー氏自身確信しているという話であった。(378 . 9 頁)

当時、横浜にはすでに外国の銀行がいくつか支店を設けていたが、金融機関の進出がない地域では、商社がしばしば銀行類似の業務を行っている。^⑪ また、秘密裡に事を処理するためにも、グラバー商会の持つイギリス政府勘定の貸方に払い込むというような方法を考えたのであろう。

当然のことであろうが、グラバーはこの提案を断っている。彼は商人としての分限をわきまえていたようであるし、また、そのような政治問題に介入できる程の力を当時はまだ持ち合わせていなかったであろう。^⑫ しかし、短い記述からの推測に過ぎないが、この賠償金支払いについてのいきさつから、薩摩藩 (あるいは長崎薩摩屋敷の人々) が、いかに大きな信頼を彼に寄せていたか知ることができるし、グラバー商会が将に時流に乗りはじめた姿をここに見ることができる。

グラバーはレニーを先ず五代に引き合わせている。この秘密交渉が、五代個人の責任で行われたように理解するむきもあるが、多分そうではあるまい。五代はレニーを当時の長崎での薩摩藩の最高責任者「ミノジ」^⑬ なる人物に引き合わせ、この人物も戦争回避については五代と全く同意見である。

彼は五代とすでに検討済みの同じ問題を、ただちに検討し始めた。特に船の到来を防ぐ可能性に関することであった。まもなくわれわれの席にグラバー氏と五代ともう一人薩摩の高官も加わった。三人とも、その問題に最大の関心を持っているように思われ、もしその金をドルで

支払うことができないならば、何か困難が起るだろうかという質問を私は受けた。（377 頁）

日本の通貨で支払う方策が彼らの頭の中にあっただけであろう。表向きはともかく、藩主脳部は戦争回避のために苦慮していたのではないか。三人の薩藩要人についてのこの記述の具体性は、賠償支払いの画策が、五代の独断だという説を否定するように思う。

一般に薩摩藩は歴史的に外国と接する機会が多く、従来、外国と事をかまえることを避けるのを藩是としていたようである。「鹿児島県史」もいくつか資料を挙げ、斉彬から茂久にいたるまで、度々藩士に対し軽挙を戒めていたことを説明し、「生麦事件の勃発を見たのは、全く偶然の事と見なければならない」と結論している。^⑭ 長崎在駐者の苦慮は、そのまま藩庁中枢部の苦慮を反映していたと考えるほうが自然であろう。

更に戦争勃発について、五代等はきわめて楽観的と思われる意見を述べている。このことから、なお平和を模索する勢力が鹿児島現地にも相当存在することが想像できる。^⑮ たとえばレニーに対する彼らの最後の言葉は次のようなものであったという。

彼らが行なった最後の発言の一つは、船が停泊地に近づく時彼らの方で船に発砲しないようあらゆる手段を講ずるしまたそのような事件は起らず要求の手紙は平和的に受理されるだろうということ、彼らが現在もっている情報によって保証するという趣旨の確信であった。

（378 頁）

おそらく鹿児島から、彼らにこのような確信を表明させるような情報が、少なくともこの段階では、届いているのである。

五代らの危惧するところは、結局、体面と行懸りから、心ならずも戦闘状態が起こることである。次のような憂慮が表面され、軍艦来寇を取止めさせるための賠償支払方法が検討される。

もしイギリスの艦隊が鹿児島に来て公式に借金の返済を要求したなら、（支那人が言うように）彼〔薩摩公〕も臣下に対して顔が立たなくなり、もし強圧に屈して金を支払うようになれば、彼はミカドにも迷惑を掛けることになるので、その結果戦争状態が起こるであろう。

（374 頁）

また次のような理由も述べられる。

軍艦によってなされる賠償要求は、薩摩をしてその問題をミカドに任かすことにさせ、その結果は平和にとって好ましくないものになるのではないか ……… （378 頁）

この時期、薩摩はまだ幕府と事を構えることも京都の朝廷の気嫌を損ねることも望んでいない。2年後留学生を英国に送る時も、表面上は甕島及び大島等に派遣を命じて出発させている。また国外では変名を用いさせ、一種の脱藩者扱いをしている。とにかく、八方円満に事を運びたいわけで、一部の先見の明ある人々が和平を望んでも、京都を巡る情勢から公にそれに向って踏出せる一般的雰囲気ではなかったことは容易に想像できる。

さて、行懸りから心ならずも全面戦争に発展するのではないかという危惧に対するグラバー達の助言は、次の2点に要約される。すなわち、一つは、絶対に鹿児島側から発砲すべきでない、ということ。今一つは、賠償を横浜へ送金し支払うことによって艦隊来鹿を阻止することは不可能だ、ということである。

第1の問題については、砲台にいる兵士を、すべて市内に後退させる案が出され、五代らもそれがよからうと言っている。^{①⑥} 第2の問題については、レニーが次のように説明している。

私は二つの理由で出来ないと思っていると言った。第一に、船がすでに鹿児島に向けて出帆しているのは殆んど確実であるということ、第二に、イギリス政府の命令は鹿児島でその要求をなすべし、というものであることだった。

彼らの努力にもかかわらず、結局砲戦が始まり、イギリス側にも死傷者が出、薩摩側も磯海岸の工場地帯を破壊された上、市街地のかなりの部分を焼き払われるということになるわけだが、この戦闘は先の生麦事件とは違って、決して偶発的なものではなかった。戦後和平会議に際して、薩摩側は英国艦隊の汽船拿捕を開戦の端緒として論難しているが、彼ら自身も公使以下を上陸させ謀殺することを計画し、あるいは決死隊を組織して軍艦に送ったりしている。いずれの計画も実現しなかったものの、戦闘は起るべくして起ったものと言わざるを得ない。結局、開明派の考えが充分藩論として統一されるまでに、機が熟していなかったのであろう。成長のための手痛い教訓であったと言えよう。

最後に、グラバー商会の立場についていささか想像を交え、私見を述べてみたい。

イギリス東印度会社が貿易独占権を放棄することになったのが1833年であった。つづいて1846年「穀物条例」が、また1849年「航海条例」が廃止されている。これらの出来事は19世紀前半をもって、イギリスが重商主義から自由貿易主義に漸次衣替えしていったことを示す、歴史の表徴といえよう。1860年代には、従来の「砲艦外交」に対し、いわゆる「小イギリス主義」が唱えられて平和裡の貿易立国が強調されるが、国際産業社会で完全な覇権をにぎっていたイギリスにとっては、戦争による強奪よりも経済的優位を背景に平和的に世界の富を獲得することが、より安全により大きな利益を得る道につながっていたのである。グラバー商会もイギリス海外資本の底辺にあって、このような経済的動向の将内に置かれていたといえる。

グラバーは、薩英間に戦争状況を惹起せぬよう心を砕いているが、それが彼の平和主義によるものか、大局からの打算によるものか、断定する十分な資料はない。しかし薩藩とのつながりから大きな飛躍への可能性を予感していた商会の基礎が、戦乱によって危うくなることは彼にとって極力避けたいことであつたろう。また一方、薩摩の人々に対するレニー自身の好意的な感想（グラバーも同じ好意を感じていたであろう）、五代とグラバーとの深い親交を想像させる記述^{①⑦}を見ると、グラバーの人間的善意も否定することはできないように思う。当時すでに彼は薩摩の

将来性を感じとり、その発展に肩入れする気持ちになっていたのではないだろうか。^⑱

薩英戦は、薩摩にとっても一つの大転機となったが、グラバー商会にとっても、薩英和平に盡力することによって、日本に進出していた外国企業の中でその地位を飛躍的に高める契機となった。戦争後、薩摩は重野厚之丞・高崎猪太郎を長崎に派遣して、情報収集活動にあたらせている。^⑲恐らくグラバーは已れの考えるところに従って、薩摩に力を貸したであろう。日付も差出人名も欠失しているため正確な時期を知ることができないが、「忠義公史料」の中に、「英商ガラバ先日神奈川ヨリ罷帰候ニ付、彼地之模様承合候処、………」として、戦後の横浜の状況をグラバーから取材したむねの報告書がある。^⑳

例えば、

御国蒸気船を奪取候義、ガラバヨリ問掛候処、御返翰之様一ツモ意ニ叶候義無之、殊ニ薪水贈方ニ付多人数乗付之体、不審之形勢相顕レ候間、英船ニモ其用意イタン、蒸気船ヲ引出シ、質ニ取り置候テ、談判ヲ付度等存候処、砲発ニ逢候ニ付、蒸気船ヲ焼捨及戦争候次第ト致申分候由 ………

と、直接当事者に確めていて情報が正確である。敵対する英薩の真意を相方に伝達する仲介役を果たすことで、グラバーは両者談合の露払いを既に務めていたと言えるかも知れない。

薩英講和に際して、グラバーが直接何らかの役割を果たしたかどうか、つまびらかではないが、陽暦9月5日鹿児島を発った重野厚之丞（安禪）等代表団の一行は、一先長崎へ向っている。これはイギリス艦隊が長崎に立寄るかも知れないと考えたためでもあるが、大砲購入などに関する商議があったともいうから、これが事実とすれば、当然グラバーにも会い、彼の助言を求めたことが想像される。

講和後、薩英関係改善に決定的な出来事となったのは、1868年（慶応2年）6月の、イギリス公使パークス（Harry S. Parkes）による鹿児島訪問であった。これに先立って、薩摩から15人の渡英留学生を斡旋したのもグラバーであったが、それにつづくこのパークス訪鹿は、イギリスがこれまで公式日本政府として応対してきた幕府に対し、あえてその希望を無視して、薩摩藩政府といわば準公式とでもいうべき関係には入ることになった点で、その意義は極めて大きいものであった。この段取りの一切はグラバーの手によって運ばれた。このことは、「デ・ビー・グラバー史談速記」に詳しいが、このエピソードを語り終ったグラバーが「ハーリー・パークスと、それから薩長の間在って、壁を毀はしたのが、自分のした一番の手柄であった。」と述懐している。日本近代化の道程で、それを動かす一つの大きな廷子の役を果たしたのであるから、グラバーとしても、一生の会心の仕事であっただろうが、この時期を中心とする数年が、グラバー商会史の上でも、最も活気にあふれ華かな時代であったと言える。

⑧

- ① 「デ・ビー・グラバー史談速記」(山口県立図書館蔵)に、グラバー自身の言葉で1859年9月19日、日本に上陸したむね記されている。
- ② 菱谷武平「長崎に於ける冒険商人の性格 — 雅羅馬とグラバー邸」(長崎大学学芸学部「社会科学論叢」第11号、昭36.6)36頁。また、McMaster, J.: The Takashima Mine: British Capital and Japanese Industrialization (Business History Review, Autumn 1968) 220頁に“From 1859 onward the firm of Glover and Mackenzie had bought and sold goods, including coal, on commission for Jardine's at Nagasaki.”とある。
- ③ 菱谷上掲書36頁。
- ④ 服部一馬「高島炭坑とジャーディン・マセソン商会 — 明治初期における外国資本の企業者活動 — (小松芳喬教授還暦記念論文集「近代化と工業化」昭43)90頁参照。
- ⑤ 原著に1862とあるが、1863の誤りであろう。
- ⑥ 日本経営史研究所編「五代友厚伝記資料」第1巻13頁。
- ⑦ 日本記録にみられるGloverの仮名表記は、ゴロウル、ガラバ、グラバーの三種があるという。(菱谷前掲書37頁)
- ⑧ “The Guardian” Sept. 6, 1865. sup.p.920a.に、この書物の書評があり、著者について簡単な紹介がなされている。(cf D.F. レニー「中国・日本で用いられた英国製兵器」87頁；鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第5号。1976)
- ⑨ オランダ人監督、日本人経営と原著にあり、文久元年(1861年)蘭人技師ハルデスの工事監督の下に、幕府の手によって完成された長崎製鉄所のことと思われる。ちなみに、小菅ドックが五代・グラバーによって完成したのは明治元年(1869年)12月、また英人経営の船舶修理用造船所は文久元年(1861年)着工、翌年から操業したという。(重藤威夫「長崎居留地と外国商人」風間書房、昭42、84頁参照)
- ⑩ レニー前掲書374頁。訳文は鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第5号所収のものを用了。ただし、前後関係など理解の便宜を考え、筆者が若干手を加えたところがあることをお断りしたい。
- ⑪ 多少時代は下るが、薩摩藩が貿易勘定の支払いをグラバー商会に依頼して行なっている記録がある。薩摩商会がグラバー商会の、そしてグラバー商会がジャーディン・マセソン商会の傘下会社という形で日英間の代金決済がなされている。(拙稿「ジャーディン・マセソン商会文書解題」鹿児島県立短期大学商経論叢第25号参照)
- ⑫ グラバー商会が真に政商として活躍をはじめるのは薩英戦後である。そのもっとも大きな仕事はパークス訪薩の仲介をつとめたことであった。先出菱谷「長崎における冒険商人の性格」中に、「外人居留地に於けるグラバー勢力推移表」があるが、借地状況から推察される

グラバー商会の規模は、文久年間にはまだ微々たるもののようである。

⑬ 当時聞役として長崎滞在中の蓑田伝兵衛のことと思われる。

⑭ 「鹿児島県史」第3巻190頁。

⑮ 「鹿児島県史料－忠義公史料」に「当時藩内ノ人気」と題して「若シ英艦渡来セハ直ニ砲発粉碎セン、命令ヲ待ハ後レタリトスルノ形況ナリ、茲ヲ以テ藩庁大ニ憂慮シ、命令ニ違ヒ、軽忽ノ所為アル事勿レ、若違背スル者ハ同伍・什同罪タルヘキ旨、操練終テ物主ヨリ厳令ヲ下シタリ」（第2巻424頁）とあり、強い慎重論の存在を読みとることができる。

⑯ レニー前掲書378頁。

⑰ たとえば同上書378頁。

⑱ 先にも引用した「デ・ビー・グラバ史談速記」の中で、軍艦買付の話と関係してグラバー自身「私は世間からして金儲主義だと思はれたかも知れぬけれ共、私の気象はお前〔中原邦平〕も知っている。それは、金儲という事も有ったけれ共、単純にそれのみじゃ無かった」と言っているが、この言葉は彼の行動の基調を良く表わしていると思う。

⑲ 「鹿児島県史料－忠義公史料第2巻736頁に、横浜発行の英字新聞が7月19日鹿児島に届けられた件に関し、重野・高崎が「戦争後夷情探偵ノ為メ出崎」との記述がある。

⑳ 上掲忠義公史料763頁。